



織工

Die Weber

清流劇場 2020年3月公演
[織工たち Die Weber]

Schauspieler/出演

Ueda Taizo 上田泰三 MousePiece-ree

Takaguchi Shingo 高口真吾

Kuramasu Tessyuu 倉増哲州 南森町グラスホッパーズ

Mine Motoko 峯 素子 遊気舎

Hattori Momoko 服部桃子

Hinaga Takako 日永貴子

Tamura K-1 田村 K-1

Nagatsu Mana 永津真奈 Aripe

Mantani Masayuki 萬谷真之

Sogi Akoya 曾木亜古弥

Kawashima Muu 川島む一 お茶祭り企画

Higashide Masuyo 東出ますよ

Doi Kyouya 土肥嬌也

Tomisako Haruki 冨迫晴紀

Tsubota Naohiro 坪田直大 音声劇団五里夢中

Hamamoto Katsuya 浜本克弥 小骨座

Sashou Kakeru 佐松 翔

Fukami Yuuki 深見悠稀

Komposition & Klavier/音楽・演奏

Semba Hirofumi 仙波宏文

原作/ゲルハルト・ハウプトマン Text/ **Gerhart Hauptmann**

構成・演出/田中孝弥 Bearbeitung & Regie/ **Tanaka Atsuya**

翻訳・ドラマツルク/丹下和彦 Übersetzung & Dramaturgie/ **Tange Kazuhiko**

ドラマツルク/柏木貴久子 Dramaturgie/ **Kashiwagi Kikuko**



Die Weber

「ぼくらの」

清流劇場 代表 田中孝弥

昨年から今年にかけて映画界では、貧困問題や格差社会を扱った『万引き家族』・『パラサイト』が注目を集めています。今回清流劇場が上演する『織工たち』でも、同様の題材が扱わ

れています。特段時流に乗って、この作品を上演しようとしたわけではありません。現代社会を生きる人々や、自分たちの暮らす現在を描こうとした結果、この作品を上演することになったのです。

この作品は「虐げられる者と搾取る者の対立」や「暴動という一種の革命行動」について触れています。今回演出するにあたり、ボクにはもう一つ考えてみたいことがあります。それは、そもそも「人間はなぜ働かなければならないのか？」と言うことで

す。ハウプトマンが（敢えて？）言及しなかった部分について、「凡庸で下らない蛇足だ」とのご批判も覚悟しつつ、ボクなりの言葉でワンシーン挿入させていただきました。

「働かざる者食うべからず」という言葉に代表されるように、「人間はなぜ働かなければならないのか？」という問いに対して、「食べていくため」という強い説得力を持った一つの答えがあります。しかし、これからの社会は、ボクたち人間が従事してきた労働がどんどん機械に取って代わられていきます。これまで誇りを持って従事してきた仕事も、機械化の波に呑み込まれていくでしょう。勿論、技術革新に伴い、また新しい仕事も生まれてくるでしょうが、そろそろ「食べていくた

め」以外の答えの可能性や「労働とは何か？」について根源的に考える時期に来ているように思います。ベーシックインカムに代表される全く新しい経済政策の許で暮らす可能性も考えれば、尚更です。

確かに哲学的難問ではあります。簡単に答えはでないでしょう。この「ご挨拶」を書いている時点でも、ボクも悩んでいます。悩んでいます。この公演の上演時点での考えを一度は確定させなければなりません。

今、この公演でボクなりに到達した結論は、「労働とは祈りである。隣人を愛する行為である。」と、しました。

本日はご来場いただき、ありがとうございます。ごゆっくりお楽しみくださいませ。



祈れども 甲斐はなし

大阪市立大学名誉教授・清流劇場ドラマトゥルク **丹下 和彦**

ナポレオン退場後一時王政復古したフランスは1848年の2月革命とそれに続くナポレオン3世の登場によって新しいフランス国家に生まれ変わる。プロイセン（ドイツ）は1848年の3月革命後、領主制解体による農民解放と産業の促進（工業化）を迎え、さらに1870年の普仏戦争でフランスを破ったのち近代ドイツ帝国に生まれ変わる（1871年）。

戯曲『織工たち』は、ドイツ3月革命のわずか4年前のドイツ東部（現ポーランド領シュレジエン）を舞台とし、そこで起きた住民の一揆を素材とした自然主義リアリズム劇である。

19世紀ヨーロッパは政治も経済も、そして文化も、世紀の初めから大きく変動していた。おまけに農作物は不作続きだった。

いつの時代にも世の波に乗れない人間がいる。世の中の発展に取り残される人間がいる。願えども祈れども救いの手から零れ落ちる人間がいる。「頼めども願えども甲斐はなし。／泣いてはみても、すべて無駄」なのだ。

痩せた飼い犬を屠殺して食べる話がでてくる。土中に埋めた死に馬を掘り出して食う話がでてくる。

手織りの布の賃仕事で食いつなく貧民たち。それを搾取する工場主。しかし搾取する側も外国との関税競争に翻弄されて自転車操業の綱渡り。中央政府の役人は収拾策を知らぬ。絶望した貧民の怒りは反乱となって目先の敵、富の収奪者たる工場主に向けられる。人間、怒り狂うと真の敵を取り違える。

彼らは立ち上がる。目に見えぬ敵がいることは承知していても、それに抗う術を知らず、手近に見える敵らしきものにただ単純に怒りをぶつける。

緊迫した最終章——織工のバオメルトが幼馴染に別れを告げて修羅場へ身を投じる。

なるほどな、ヒルゼ、わしゃ少々おかしいかもしれん。けど、頭ん中はすっきりしとる。今度のこと、おまえさんにゃおまえさんの考えがある。わしにゃわしの考えがある。

…… 〈略〉 ……

なあヒルゼ、人間ってものはなあ、ほんのいつときでも息ついてみてえ時があるもんよ。

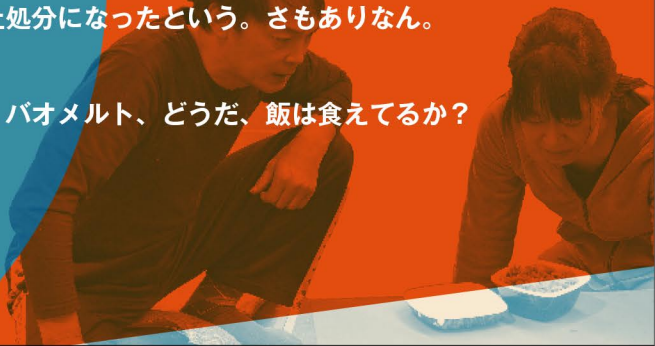
（ゆっくりドアのほうへ行く）達者でな、ヒルゼ！ 何かあったら、わしのためにも祈ってくれ、いいな。（退場）

その直後、ヒルゼは流れ弾に当たって命を落とす。

ここに描き出されているのは社会の近代化に伴うひずみ、形骸化し弾力性を失った教会組織、その中に埋没する庶民の救われようのない姿である。彼らは朴訥なシュレジエン方言（これを適切な日本語に直すことは難しい）で現世を糾弾する。暴徒化した貧民の群れはやがて軍隊の銃弾で一扫されるだろう。それでもそれは来たる3月革命を予兆する狼煙となったはずである。ただハウプトマンが一揆と革命という二つの事象を相互に跡付けて書いたのは、やっと50年後の1892年（初演は1893年）のことだった。

初演から127年、いまわたしたちはこれを上演する。言っておくが、これはいわゆる革命劇ではない——ではないが、かつて当局の不興を買って一時期上演禁止処分になったという。さもありなん。

おい、バオメルト、どうだ、飯は食えてるか？

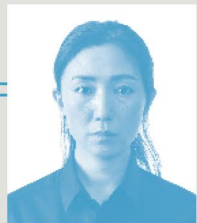


物語のあらまし

時代は一八〇〇年代半ば。舞台はシュレージエン地方（旧ドイツ東部・現ポーランド領）の田舎町。イギリスからの木綿輸入に加え、紡織機導入に圧迫され、さらに経営者の搾取にあつて、当地の織り産業の従事者・織工たちは惨めに暮らしている。どこかの家も皆、ボロを身にまとい、腹を空かせて飢え死にする者が出るほど生活は困窮している。

——物語はこのような悲惨な暮らしをしている織工たちが、紡績業の機械化に反抗し一揆を起す群衆劇です。これは、一八四四年の夏、シュレージエンのオイレンゲビルゲ山中の織工たちが、紡績業の機械化に反抗し一揆を起こした史実に基づいて書か

Chart《人物相関図》



ドライシガー夫人
永津真奈



プファイファー
(納品係)
倉増哲州

織物の査定を行う



服の販売

旅行者
佐松翔

蔑視



ホルニヒ
(屑屋)
峯素子

傍観



ヴェルツェル
(居酒屋の亭主)
倉増哲州

同情



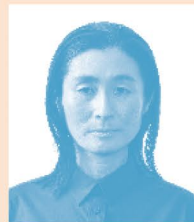
ベルタ
服部桃子



バオメルトの妻
日永貴子



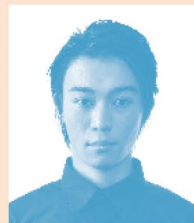
アンゾルゲ
曾木亜古弥



ハインリヒの妻
川島むー



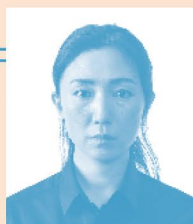
ライマン
坪田直大



ハイバー
深見悠稀



ミールヒェン
服部桃子



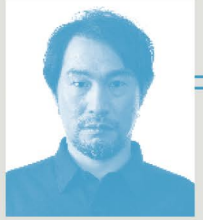
ヒルゼの妻
(故人)
永津真奈



フリッツ
富迫晴紀

染め物工場の労働者

森和雄
深見悠稀
富迫晴紀



ドライシガー
(綾織物の工場主)
田村K-1

経営者たち

悪意



ヴィーガン
(指物師)
萬谷真之



警察署長
上田泰三



クチェ
(巡査)
坪田直大

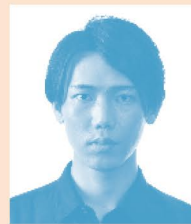


キッテルハウス牧師
萬谷真之



バオメルト
上田泰三

親友



ベッカー
浜本克弥



イーガー
(元兵士)
土肥嬌也

弟

妹

兄



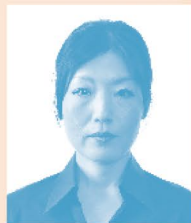
ヒルゼ
高口真吾



ルーイーゼ
日永貴子



ゴットリーブ
佐松翔



その他の織工たち
東出ますよ
+
森和雄

織工たち

長屋の住人たち

田村K-1
倉増哲州
永津真奈
萬谷真之
富迫晴紀

れたものですが、貧困にあえぐ庶民、彼らを律する宗教、収奪する工場の旦那衆、我慢しきれず立ち上がる民衆の姿がじつにリアルに描き出されています。劇には特定の主人公は置かれず、全編を貫く筋も持ちません。また、「織工たち」善」「経営者」悪」という善悪二元論で世界を解釈する戯曲でもありません。群衆劇という形を取りながら、各場面に立場の異なった人物が登場し、各々が世の中への思いを口にし、総合的に織工たちとその周辺の姿が一つとなって浮かび上がってきます。階級闘争を目的として描いているのではなく、人間愛に裏打ちされた筆づかいで、「貧しき者と悩める者のために闘う人たち」を描き、わだかまりの解けた愛と和解の世界への憧れを暗示している作品です。

作品の解説

今、なぜこの作品を演じるのか。演じる必要性があるのか。一星の数ほどある作品群から上演題目を選ぶとき、今いちど考えられるべき問いである。すでにその普遍的価値を付与されている古典的作品から選択する場合でも、わたしたちが生きる現実世界との関連性を作品の中を探ることは極めて重要である。いや、わたしたちの生との関わりを示すことができこそ、その作品を舞台に挙げる価値があるというものだ。

今回の上演作品『織工たち』をハウプトマンが執筆したのは一八九一年のこと。彼が参考としたのは、一八四四年六月四日から六日にかけて起こったシュレージエンの織工蜂起であった。この事件から遡る十八世紀、シュレージエンを領土としたプロイセンの啓蒙専制君主フリードリヒ二世は、工場制手工業（マニユファクチュア）の重点地域として織物業の発展を図った。ヨーロッパ中にリネンを輸出し、栄華を誇っていたシュレージエンの織物業は、折しも大王と呼ばれたフリードリヒ二世の時代を頂点とし、その後、衰退に向かうこととなる。原因は十八世紀末、イギリスの紡績業を中心に起こった産業革命であった。イギリス製品の流入、進む機械化の波はシュレージエンの織工たちを圧迫していった。織物を買ひ叩く商人と重税を課す土地所有者、すなわち資本主義と封建制度によ

り二重に痛めつけられた織工たちはついに蜂起する。

ハウプトマンは資料収集と取材を行いながら、事件から約半世紀に、この「シュレージエン織工の貧窮」を作品化した。執筆の頃にはイギリス発の産業革命はさらに世界に広がっており、一八七一年に成立したドイツ帝国では、工業化発展のなか「会社設立時代」と言われる起業ブームが訪れる。シュレージエンでは農業、そして家具など木材製品が評判を上げる一方で、紡績分野は引き続き厳しく、リネンを追うかたちで発展してきた木綿も外国製品に苦戦を強いられていた。例えば羊毛を植民地オーストラリアから輸入するイギリスのように、原料調達に有利な状況にもないなかでの競争である。結局、半世紀たっても織工たちの状況はさして変わらない、という印象をハウプトマンは抱いていたのだ。

そもそも織工は牧歌的な職業とされてきた。ゲーテは『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代』の中で、機織りの仕事を「信仰心に支えられ、勤勉と秩序で活気づけられた家内工業」と捉え、自らの堅実な労働リズムに合った分量を、繰り返しの作業によって生産する、幸福に満ちた調和を機織りの仕事に見ている。織工という職業の衰退は、牧歌的工業から工業化生産への完全な移行を意味し、市場の競争はグローバル化によってさら

に厳しさを増す。かくて織工は格差のシンボルとなる。

ハウプトマンは虐げられた労働者が立ち上がる革命を期待したのだろうか？ 十九世紀の社会構造の変化が生み出したこの悲劇を、シュレージエンの方言を通して写実的に描くことで変革を促そうとしたのだろうか？

ハウプトマンはリアリズムの人である。フランス革命が恐怖政治に絡み取られていった顛末を、作品ではウィットイッヒ（本上演ではヴェルツェル）に言及させている。作品中唯一の革命への言及で吐露されるのは、革命への懸念なのである。作品が中心に据えているのは、工場生産に圧迫された手工業の没落、産業化がもたらす社会構造の変化、その結果としての格差という社会問題である。その実状、苦しみもがく人々の心理を写実的に表現しながら、しかし、飢餓とやるせなさから織工たちが起こした暴動を肯定も否定もしていないのだ。同時代の作家テオドア・フォンターネは、革命劇としての一貫性を与えた方が作品として成功していたのではないかと問いかけながら、革命を鼓舞するように始まった物語が、逆にアンチ革命に終わっていきようでもある「未決性」を指摘している。

『織工たち』に結び付けられがちな政治性について、ハウプトマンは「悲哀と飢饉のドラマではあるが、社会民主主義的世界観の賛

美ではない。」ときっぱり否定している。興味深いのは、文学作品における政治的意図を再三否定したハウプトマンが、『織工たち』を「キリスト教的な作品」だと定義づけていることである。牧歌的機織り業の終焉は、ヒルゼの死に象徴されるのだが、彼こそ勤勉と秩序に勇気付けられながら、堅実に働き続けることに価値を置き続けた人物だった。敬虔なキリスト教者であるヒルゼは、古き良き機織り職人の典型である。ハウプトマンの言う「キリスト教的」は「倫理的」と言い換えることができよう。そして過酷な運命にさらされたとき、人はどう行動するべきか。その道しるべを、キリスト教徒のヒルゼはキリスト教の神に求めるのである。

社会構造に変化をもたらし、シュレージエンの織工たちを襲った産業革命は「第一次」に過ぎない。十九世紀後半の第二次産業革命はエネルギー分野で起こり、二十世紀後半の第三次ではインターネット、ICT（情報通信技術）の出現と普及が起こった。わたしたちの日常生活を例に考えてみても、情報コミュニケーションを取り巻く状況が、この十年、いや数年の間にかに変わったか、驚きを禁じ得ないのではないだろうか。

そして現在進行中の第四次産業革命は人工知能（AI）とロボット技術を軸としている。今まで人間が行ってきたことを、機械が

請け負っていくのである。変化は加速している。第一次産業革命では、機械に仕事を奪われた人々が「パンか、血か」をスローガンに機械打ちこわし運動を行なった。現代のわたしたちはそのような抵抗が功を奏さないことはよく知っているし、新技術が新たな職種や雇用を生み出すことも、経済成長を促し得ることも知っている。そしてそれにより労働市場において新たな競争が生じることも。

舞台では、このままではどうしようもないという状況に陥った登場人物たちが心の声を上げる。飢餓、怒り、やるせなさからくる絶望感に、人はどう立ち向かえばいいのだろうか。血気盛んなベツカー、つましく働く夫と子供たちを何とか支えようとする女たち、悩む人アンゾルゲ、故郷の惨状に心痛める帰還者イエーガー、経営に苦しむ工場主ドライシガー、「勝ち組」に残ろうとするプファイアー…

人はそもそも何のために働くのだろうか。働く人は皆、相応しい労働の対価、成し遂げた労働への敬意を求めるものではないだろうか。織工たちが求めるものは、実はわたしたちが求めるものに通じている。

作家紹介

ゲルハルト・ハウプトマン (Gerhart Hauptmann 1862年~1946年)

ドイツの劇作家・小説家。当時プロイセン下のシュレージエンの温泉療養地オーバーザルツブリュンに旅館の息子として生まれる。シュレージエンは1871年、プロイセンが率いるドイツ帝国の成立とともに、その一部となる。イプセンの『幽霊』に触発されて書いた『日の出前』（1889年）の上演成功によって、ドイツ自然主義の代表的な劇作家としての名声を得る。その後、ロマン主義・象徴主義的立場に移行しながら、ドイツ近代劇の発展に寄与。

1912年、ノーベル文学賞を受賞。1932年、ゲーテ賞を受賞。最初の結婚で得た財力を基に、いくつかの住居を有しながら大市民的生活を送ってきたハウプトマンは、終戦の翌年、故郷シュレージエンに戻り、その地で病没。享年83歳。

1893年、貧しい機織り（はたお）りたちの抵抗を描いた『織工たち』が初演。翌年のベルリン公演ではドイツ帝国皇帝ヴィルヘルム2世は不快を示した。作品は社会主義の宣伝劇だという誤った評価がなされ一時

上演禁止になるが、後年には、ドイツの戯曲において、プロレタリアの生活の実状が初めて芸術的に造形された、世界的にも優れた自然主義文学作品として評価されている。なおハウプトマンがこのような題材に目を向けたのは、幼少の頃より周辺の寒村の貧窮に同情の目を注いできたこと、また祖父が貧しい機織りだったことなどによる。

主な作品：『ビーバーの毛皮』『沈鐘』『駈者ヘンシェル』等

2020年 3月 11日(水) 19:00

12日(木) 19:00

13日(金) 14:00・19:00

14日(土) 14:00

15日(日) 14:00

(14日終演後アフタートーク開催)

会場／一心寺シアター倶楽

大阪市天王寺区逢坂 2-6-13 B1F tel: 06-6774-4002 <http://isshinji.net/kura/index.html>

舞台監督／K-Fluss 舞台美術／内山 勉 舞台美術アシスタント／新井真紀
照明／岩村原太 照明アシスタント／塩見結莉耶 照明オペ／木内ひとみ 音響／廣瀬義昭(㈱ティアドクルー)
衣装／HIROKO 小道具・パンフレット本文デザイン／濱口美也子
ヘアメイク／島田裕子 ヘアメイク監修／齒梁原諭子(High Shock) 振付／東出ますよ
写真／古都栄二(㈱テス・大阪) ビデオ／㈱WAVIC web・制作協力／飯村登史佳 宣伝美術／黒田武志(sandscape)
特別協力／森 和雄 演出助手／大野亜希

協力／(有)アーティストックポイント (有)ウォーターマインド イズム (株)舞夢プロ (株)リモーション 10ANTS (株)ウイングウエーブ
パンタンデザイン研究所大阪校 堀内立誉 佐々木治己 川口典成 森岡慶介

提携／一心寺シアター倶楽

制作／永朋 企画／一般社団法人清流劇場

アフタートーク出演者／

パネラー：柏木貴久子(関西大学教授・清流劇場ドラマツルク) 田中孝弥(清流劇場代表)

 芸術文化振興基金助成事業

 大阪市助成公演

<https://seiryu-theater.jp>

お問い合わせ：清流劇場 e-mail: info@seiryu-theater.jp

清流劇場ウェブサイトでは、過去の作品のダイジェスト映像や舞台写真を公開しております。是非、ご覧ください。

